

# 二〇一七年 年頭司牧書簡

「札幌教区の新たな世紀に向けて、

## 第一歩を踏み出そう」

司教 ベルナルド 勝谷 太治



新年のご挨拶を申し上げます。今年も教区の皆様に神の豊かな祝福がありますように。

昨年は教区百周年の行事が行われ、提示された多くの課題に対して各地区からの多くの有益な提言がなされました。今年は、これらを受けたうえでその実現に向けた取り組みをさらに進める年としたいと考えます。提言の中で特に

印象的だったのは、維持管理が難しくなっている地方の小規模小教区を念頭に置いた問いかけ「建物に頼らない共同体とは」という課題に対して、あえて建物の放棄や安易な小教区統合等に行わず、逆に今ある危機感をばねとして信徒の力を結集させ、共同体を活性化させる報告が複数なされた点です。教会堂は信徒が集まるための建物としてだけではなく、地域の信仰のシンボルとし、宣教の拠点として活用するという本来の宣教の在り方への回帰が、司祭不在、信者数に関係なく現状でもできることのあかしと受け止めることができます。また、信徒奉仕者の実践例や、外国籍の方たちの参加による教会の雰囲気の変化や活性化の例、今までは違った青少年活動の在り方等が報告されました。

私は、教区の未来を見据えたヴィジョンは一部の人たちの机上の論議で

出されるものではなく、多くの実践例から識別して築き上げられるものであるべきと考えています。なぜなら、神

の意志は取り組んだ物事の結果に表れるからです。私が机上で考えた「建物によらない共同体」というヴィジョンはその例かもしれません。提示された意図とは真逆の方向で共同体が活性化される例が提示されました。とはいえ、それは全小教区に言えることではなく、地区によっては建物の維持よりも、生き生きした小共同体を築いていくことが最善の策であるかもしれません。あるいは教会維持の負担をそれぞれの小教区ではなく、大きな教会を含めた地区で担い、単なる維持のためではなく宣教の為の拠点として地区全体が地方に責任を持つ体制も求められていると思います。それぞれの小教区の在り方については、画一的なヴィジョンの強制ではなく、それぞれの地域での取り組みとその結果によって、地域

固有のヴィジョンを組み立てていく現場主義が大切でしょう。

その他の多くの提言がなされましたが、私が百周年式典訓話で述べたことをあえて繰り返したいと思います。「どんな小さな提言も、実践する中から新たな道が開けてくる可能性があります。確かに、これら提言による実践活動がすべて実を結ぶかどうかは分かりません。無駄な努力だったということになるものもあるでしょう。しかし、何もしないところからは何も起こりません。また、意外なところから未来への展望を開くうねりが生まれるかもしれません。神は、いつも人間の思惑を超えて働かれるからです。明日に向けてのささやかであっても希望を感じさせてくれる多くの種を植え育てることによって、そこに神が働かれることを私たちは確信しています。人間の業は小さなものです。しか

し、誰かが始めたその小さな業が、多くの時代を変える力となっていくことを私たちは知っています。私たちの切なる祈りをもってなされる行いに神は必ず応えてくださり、教会の未来を照らして」くださるでしょう。

次に教区としての新しい取り組みについて、お知らせします。教皇様の強い意向により、教会の聖職者による虐待やハラスメントへの対策が強く求められ、札幌教区でも対応を検討してきました。そして、「女性と子供の権利擁護のためのデスク」を設置することとし、スタッフを選任しました。教会は宗教組織であり、ある意味聖職者が非常に大きな権限（支配力）を持つ特殊な組織です。それがゆえに、聖職者に問題行動があっても相談の持つべきどころがなく、表面化しにくい傾向があります。アメリカのポストンで発覚したスキャンダルを受け、世界中に

あるこの教会の体質が鋭く問われていきます。札幌教区では担当窓口を設け、司教や他の司祭たちが問題を不適切に処理することのないように、窓口を通して司祭の関わらない独立した弁護士を含む第三者委員会を設置し、そこへ問題をゆだねる対応を取ります。詳しいことは、近く体制が整った段階で全小教区にお知らせします。

また、この秋には今の司教館業務とベネディクトハウスの機能を統合し、さらに各委員会等の活動の場としての建物が完成する予定です。加えて大きな研修会や会議が行えるホールもつくられ、更には10人程度が宿泊できる独立した階も用意し、信徒の研修や黙想会等にも利用してもらえようになります。この建物はとりあえず、新司教館とかカトリックセンターと呼ばれています。完成までに正式な通称（呼称）を皆さんから募集したいと思えますの

で、たくさんのお応募を期待します

また今年は日本の教会として喜ばしい出来事、高山右近の列福式が2月に行われます。福者が誕生することの喜びよりも、なぜ右近が福者となったのかをその霊性を通して知る必要があります。人の命を奪う戦国武将が福者にふさわしいとされるまでになった右近の人柄と信仰に学ぶ機会をぜひ持つてください。

さらに、世界に目を向けて昨年を振り返ると、個人の体験で印象に残っていることは、4月の二つの出来事です。一つはフィリピンのミンダナオ島中央部で遭遇した農民と軍、警察との衝突。もう一つはその直後ローマで行われた「非暴力と正義の平和」会議です。

ミンダナオでの体験は、私が支える会の代表を務めるイースタービレッジ

ジを訪問した時の出来事です。エルニーニョの影響で東南アジア各国を襲った干ばつにより、当地では2ヶ月以上一滴の雨も降らない状態が続いていました。作物は全滅し収入がなくなって食べるにも困り始めた農民が政府に援助を求めたのです。しかし、行政の対応は遅く、山を下りて街に行けば食料庫にある麦を分けてもらえないという出所のわからない情報に踊らされ、おびただしい数の農民が食料庫前の道路をふさいで座り込みを始めたのです。そこはミンダナオ島の幹線で、これにより交通が遮断され人の行き来や物流が完全にストップしてしまいました。イースタービレッジは現場から200メートルほどしか離れていないところにあるのですが、街に入ることができず、ラジオで情報を得るしかない状態でした。そして、突如の発砲、多数の死傷者が出る大規模な衝突となったのです。詳細はここで

は書けません、衝突の原因は非暴力で平和裏な座り込みをしていた農民に混ざっていた反政府活動家が仕掛けたものでした。しかし、武器を持っているにもかかわらず、挑発にたいして軍と警察は農民に銃撃を加えたのです。農民は投石で対抗しましたがあつという間に鎮圧されてしまいました。

その後、フィリピンの訪問を終えてすぐにローマへ向かい、上述の会議に参加しました。そこで出されたメッセージは「正義の戦争」の名の下に世界中で起こっている紛争やテロに対し、現代の如何なる戦争にも「正義」などあり得ず、非暴力による「正義の平和」こそが我々の選択すべきものであるというものです。そのメッセージは教皇様に非暴力のメッセージを次の回勅で出していたいただきたいという願いをつけてそのまま上申されました。こ

の内容は今回の1月1日世界平和の日メッセージに色濃く反映されていますので教会に掲示されているメッセージをぜひ読んでください。

私は、この二つの出来事は関連のない別々のことと思っていました。しかし、昨年ようやく日本語訳が出た教皇様の回勅「ラウダート・シ」では、氣候変動は人間活動のあらゆる分野とつながって引き起こされており、異常気象も戦争や紛争も決して関わりのない別々の出来事ではなく、むしろ非常に密接につながっていることが語られています。そして、異常気象も戦争も、真つ先に被害を受けるのは貧しい人たちであることが何度も強調されています。フィリピンの出来事もこの回勅をとおして氣候変動と紛争が深くつながっているということに気づかされます。さらに、日本の利益至上の経済、原発、基地問題も別個の間

題ではなくより広い観点から見すべてが結びついていることに気づかされます。特に原発に関しては日本の全司教が一致して新たなメッセージを昨年暮れに出しているのです是非読んで皆さんの判断の参考にしてください。このように教皇様が訴える環境問題は、経済構造のみならず、戦争やテロ等の正義と平和、人権問題と深くかわり、そして私たちの靈性に深く関わる日常生活の問題です。各小教区でも、この回勅や司教団メッセージを材料とした勉強会をすることを強くお勧めします。

長くなるのでここで筆を置きます。札幌教区の皆さんが各地で宣教する共同体を目指して、具体的な取り組みを進め、あるいは新しいチャレンジを始めてくださるよう大きな期待を込めながら、神の導きが皆さんの働きの上にあるようお願いを送ります。